

改訂第2版の序

初版『はじめの一步のイラスト生理学』は、“とっつきにくい”と言われることのある「生理学」を、主にコメディカルの学生向けに、イラストを多用して、エッセンスのみを記述することを試みたものである。図を掲載するのなら、必ず、わかりやすい説明があるという方針で執筆した。また、「しかしながら別の説もあってわかっていない」というような記述は、学問的には正しいかもしれないが、わかりにくくするだけなので一切行わないこととした。

うれしいことに、多くの大学で参考書として取り上げていただき、多くの読者を得た。初版では、大学での参考書、副読本との位置付けで企画したため、ページ数も制限し、通常の生理学の教科書で取り上げている項目をすべて記述することはあえて目指していなかった。さらに、記憶、睡眠の章のように、近年発展してきた分野を、あえて一つの章にして解説を行った。このような点が他の教科書にはないユニークなものとなったと自負している。

しかしながら、多くの大学等で参考書等として採用された結果、欠けている項目についても記載が欲しいとの要望があった。そこで改訂版では、血液、体液、循環系、呼吸など加筆した項目があるが、総ページ数を増やすことを避けるため、短縮した部分もある。

多くの大学や専門学校のコメディカル・コースでは、生理学は独立した科目あるいは解剖学と一緒にの科目である。いずれにしても生理学に割り当てられた講義数は最大でも年間30コマというのがほとんどである。そこで本書は、1年の講義を通して生理学の基礎知識を学べるよう22章にまとめた。各章に記述してある内容が1ないし2コマで講義されるであろう。本書の記述を学生が理解すれば、必要最低限の生理学を習得したといっても過言ではない。

本書の記述について、大学等の教員から解説を受け、さらに、もっと詳細に書いた結果厚くなっている本格的な生理学の教科書で勉強してもらえれば、本書の意図が達成されたものと思う。

最後に改訂にあたり羊土社の編集担当の山下志乃舞さん、山村康高さんからわかりにくい記述等の指摘を受けた。感謝の意を表したい。

2011年10月

照井直人

初版の序

生理学はもっぱら生体の機能について議論する学問である。議論は論理的、体系的になされている。生理学は、対象として正常な生体を取り扱うので、一見、病気とは直接かかわりが無いかもしれないが、さまざまな病態を理解するうえで解剖学と並んで不可欠な学問分野である。

古典的な生理学から、分子生物学、薬理学、免疫学などが、さらに詳細に研究する学問分野として派生してきた。それでもこれらの分野を除いた現代の生理学が取り扱う研究対象は非常に膨大である。本書の目的は、この膨大な生理学の分野をまず覗いてみて欲しいというところにある。本書は、これから医学分野に進む学生にとっての生理学の序文である。すでにコメディカルの分野で活躍している人にとっては、昔学校で習った生理学を再度学習するために、昔購入した膨大な生理学の教科書を読む前に一読すると、理解が容易になる書である。これらの教科書に目を通せばわかるとおり、生理学という体系的な学問の目次だけを書いて10ページでは足りない。ましてや、この小冊子にすべてをまとめるのは不可能である。本書では、従来からある多くの教科書のようにすべてをきれなくカバーすることよりも、そのエッセンスとなる基本的な知識や考え方に重点をおき、図を多用し理解しやすいことを試みた。しかし同時に図がすべてを物語っているわけではないことに注意してほしい。図には省かれて描かれていないことがたくさんある。これらの省かれている点は、将来研究が進んだら重要な意味をもつことになるかもしれないが、入門書としての本書の目的から省いてある。図で基本的な論理、説明の骨子を理解したうえでさらに詳細な点を学習してほしい。

本書が、看護学、栄養学、臨床検査学などコメディカル分野でこれから活躍する人、すでに活躍している人、医学部出身ではないので生理学を学んだことがないが医学の分野で研究している大学院学生の、現在のあるいはこれから進む分野で活躍するための基礎的な生理学の知識、考え方を身に付けるのに役に立てば幸いである。

2007年2月

照井直人